

目的 懐石とは何かを明らかにし、日本の食文化の核心に迫る。

考察 懐石料理については作り手について色々研究されているが、懐石とは何かという本質にかかわる考察がない。茶道研究家の熊倉功夫氏によれば、懐石とは侘の心を表現するものであって、美味を目的とするものではないという。ところが、懐石料理は非常に手間も経費もかかるもので、一種の工芸品の姿を成している。つまり、侘という言葉の意味からはかなり離れたものとなっている。また、食事か何故に侘びの心を表現することになるか不明である。

結論 懐石と精進料理の近さと遠さは、茶の湯が侘び茶となったことに由来する。侘の心か表現されるのは、食餌という物ではなく、食事という「こと」による。会席と懐石はその儀式的性において連続するものであるが、キリシタン文化の影響を受けて侘が定着した。辻喜一氏の懐石についての説明を分析すると陰陽五行説が現われてくる。辻氏の意識にかかわらず、陰陽五行を利休は意識していたと考えられる。キリシタン文化の影響は、主人が自ら給仕するところに現われる。

懐石とは禅の故事に由来するが、中国の陰陽五行、キリシタン文化、日本の神道の考え方が総合されたものであって、質素を意味する侘ではない。昨年、本学会で発表した「茶室のコスモロジー」で述べた、茶室が宇宙の縮図であるのと同じく、懐石料理は宇宙の縮図を表現し、それを飲食することは、宇宙と一体化することの意味する。